

## ■ PCN だより

### PCN Volume 70, Number 5 の紹介

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 70 (5) には, Regular Article が4本掲載されている. 国内からの論文は著者による日本語抄録を, 海外からの論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する.

#### (国内からの論文)

##### Regular Article

1. Post-traumatic growth of children affected by the Great East Japan Earthquake and their attitudes to memorial services and media coverage

*H. Yoshida\**, *N. Kobayashi*, *N. Honda*, *H. Matsuoka*, *T. Yamaguchi*, *H. Homma* and *H. Tomita*

\*1. Department of Disaster Psychiatry, International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University, Sendai, Japan, 2. Miyagi Prefecture Comprehensive Children's Center, Natori, Japan

東日本大震災後の子どもの心的外傷後成長と法事参加・メディア視聴への態度との関連

【目的】心的外傷後成長 (post-traumatic growth : PTG) は, 「人生における危機的な出来事やトラウマティックな出来事との精神的なもがき・闘いの結果としてもたらされるポジティブな心理的変容の体験」と定義される. これまでに知見の乏しい災害後の若年者の PTG の実態や PTG に影響を及ぼす因子の解明を目的に調査分析を行った. 【方法】東日本大震災の被災地の小学4年生から中学3年生 (n=3,337) を対象として, 震災後31ヵ月時点で, PTGI-C-R (the revised Post-traumatic Growth Inventory for Children), および, PTSSC15 (the Post Traumatic Stress Symptoms for Children 15 items) の2つの自記式評価尺度を実施した. 被災体験, 震災前のトラウマ体験, 震災の記憶に関する態度については保護者と担任教員に調査を行い, これらの因子の PTG への影響を評価した. 【結果】PTGI-C-R と性別, 被災体験との間には有意

な相関を認めなかったが, 年齢との間に弱い負の相関を認めた ( $r = -0.132$ ,  $P < 0.001$ ). また, PTGI-C-R と PTSSC15 との間には非常に弱い負の相関を認めた ( $r = -0.096$ ,  $P < 0.001$ ). PTGI-C-R は, 法事参加やメディア視聴に関して前向きな態度である群はそうでない群に比して有意に高かった. 【結論】一定の配慮下においては被災に関する記憶の意図的反芻に相当する事柄への前向きな態度は, 自然災害後の子どもの PTG を促進すると考えられる.

#### (海外からの論文)

##### Regular Article

1. Reduced duration of untreated illness over time in patients with schizophrenia spectrum, mood and anxiety disorders

*B. Dell'Osso\**, *L. Oldani*, *G. Camuri*, *B. Benatti*, *B. Grancini*, *C. Arici*, *L. Cremaschi*, *M. Palazzo*, *G. Spagnolin*, *C. Dobrea* and *A. C. Altamura*

\*1. Department of Psychiatry, University of Milan, Fondazione IRCCS Ca' Granda, Ospedale Maggiore Policlinico, Milan, Italy, 2. Bipolar Disorders Clinic, Stanford Medical School, Stanford University, California, USA

時代の移り変わりに伴う統合失調症スペクトラム, 気分障害および不安障害を有する患者における未治療期間の短縮

【目的】精神疾患は顕著な機能低下を招く病態であり, 診断や治療が行われるに至るまでの未治療期間 (duration of untreated illness : DUI) が非常に長いことが多い. 社会的および文化的因子が DUI に影響を及ぼしていることを踏まえ, 診断や治療の時代的な進歩が薬物治療を受けるまでの未治療期間を短縮させるといふ仮説を立て, 今日までの精神科医療に関する時間経過を事前に3つの時代に分けて, 3つの時代のそれ

ぞれに発症した病歴をもつ精神疾患患者 (n=562) からなる大規模サンプルを対象に, DUI と関連する変数を比較評価した. 【方法】イタリアで新たな精神保健のあり方を定めた 180 号法が導入された 1978 年と 2000 年を区切りとして, 1978 年より前に発症した患者, 1978~2000 年に発症した患者, および 2000 年より後に発症した患者の 3 つのサブグループに分割した. 【結果】1978~2000 年に発症した患者と 2000 年より後に発症した患者において, 発症時の年齢, 初回診断時の年齢, および初回治療時の年齢に有意差がみられた. これに加えて, 時代の変遷による DUI の有意な短縮を認めた (1978 年より前に発症した患者: 192.25 ± 184.52 ヶ月, 1978~2000 年に発症した患者: 77.00 ± 96.63 ヶ月, 2000 年より後に発症した患者: 19.00 ± 31.67 ヶ月,  $P < 0.001$ ). また, 3 つの時代において, 発症に関連した大きなストレスとなる出来事, ベンゾジアゼピン系薬の使用, および神経症状による他科紹介の経験を有する患者の割合に有意差を認めた ( $\chi^2 = 23.4$ ,  $P < 0.001$ ,  $\chi^2 = 9.92$ ,  $P = 0.007$ ,  $\chi^2 = 16.50$ ,  $P = 0.011$ ). 【結論】今回のデータは, 時代の変遷により, 種々の精神疾患患者の DUI の統計学的に有意な短縮とそれに関連したその他の変化を示すものである. 今後の研究では, 単一の疾患サブグループに特異的な変化について評価する予定である.

## 2. Coexisting anxiety disorders alter associations with physical disorders in the elderly: A Taiwan cross-sectional nationwide study

W. H. Chang\*, W. T. Chen, I. H. Lee, P. S. Chen, Y. K. Yang and K. C. Chen

\*1. Institute of Clinical Medicine, College of Medicine, Tainan, Taiwan, 2. Department of Psychiatry, National Cheng Kung University Hospital, College of Medicine, Tainan, Taiwan, 3. Department of Psychiatry, National Cheng Kung University Hospital, Dou-Liou Branch, Yunlin, Taiwan

## 高齢者における不安障害の合併と身体疾患罹患との相関: 台湾全国横断研究

【目的】過去の研究で示唆されているとおり不安障害への罹患と特定の身体疾患への罹患とが相関しているのか否か, および, 併存する不安障害の種類

が身体疾患への罹患に影響を及ぼしているかを疫学調査に基づいて検討した. 【方法】全民健康保険研究資料 (National Health Insurance Research Database) を用いて, 60 歳以上の被験者を組み入れた. 本研究では, 不安障害 (ICD-9-CM の定義に基づく) を有する被験者 954 例および不安障害を有していない対照被験者 4,770 例を対象とした. 両群における身体疾患のリスクに対するオッズ比 (OR) を算出した. 【結果】不安障害を有する被験者では, 心血管疾患 (OR=1.33~2.80), 脳血管疾患 (OR=2.07), 消化性潰瘍 (OR=3.41) および高脂血症 (OR=2.99) に対するオッズ比が高い値を示した. また, 不安障害を有していない被験者と比較したところ, 併存する不安障害の数の増加に伴って, 末梢血管障害を除く, 先述の身体疾患の OR が増加すると考えられた. 【結論】高齢者は, 罹患している不安障害の数が多いほど, 血管系および代謝に関連する問題が生じる可能性がある. 臨床医は, 不安障害を有する高齢患者の身体疾患を慎重に評価する必要がある.

## 3. Different mechanisms of risperidone result in improved interpersonal trust, social engagement and cooperative behavior in patients with schizophrenia compared to trifluoperazine

W. S. Tse\*, A. S. W. Wong, F. Chan, A. H. T. Pang, A. J. Bond and C. K. R. Chan

\*Department of Educational Psychology, Chinese University of Hong Kong, Hong Kong, China

## 統合失調症患者におけるリスベリドンが有する種々の機序は, トリフロペラジンと比較して対人信頼感, 社会的関与および協調行動を改善する

【目的】非定型抗精神病薬 (リスベリドンなど) による治療は, 定型抗精神病薬と比較して, 社会的機能を改善することが認められている. しかし, その改善にどの社会的行動が関与しているのかは明らかになっていない. 本研究では, インタラクティブ・パズルゲームを採用し, どのような社会的行動が社会的機能の改善に寄与するのかについて, リスベリドン投与患者とトリフロペラジン投与患者で比較検討した. 【方法】リスベリドン (n=12) またはトリフロペラジン (n=12) が投与された患者 24 例を対象に, インタラクティ

ブ・タングラムゲームで社会的行動を評価する前に、陽性・陰性症状評価尺度（Positive and Negative Syndrome Scale：PANSS）のスコア、遂行機能および社会的機能を確認した。参加者は、タングラムゲームの直後に、対人信頼感およびゲームの対戦相手に対する拒絶を評価するために2種類の質問票に回答した。【結果】リスペリドン投与群では、トリフロペラジン投与群より社会的関与、協調行動およびゲームの対戦相手に対する対人信頼感が高いことが示された。さらに分

散の多変量解析を行ったところ、親和性の低い行動は陽性症状の機能であり、対人信頼感は社会的関与に影響を及ぼすが、遂行機能は低い対人信頼感または社会への非関与を説明するものではないことが示された。

【結論】リスペリドンによる社会的適応力の改善は、リスペリドンにより症状の改善とともに、社会的行動と対人信頼感が促進されることに関連すると考えられる。